

祥月法要 (11月12月)

祥月法要とは、祥月命日（故人が往生された月のご命日）をご縁として仏法に会い、阿弥陀如来の恩徳に報謝する思いでお勤めする法要です。

日時：11月5日/12月3日（英語：午前11時から）（日本語：午後1時から）

場所：トロント仏教会

※子ども会は、10時15分より始まります。

ZOOMでの参拝を希望される方は、その旨を<tbcc@tbcc.on.ca>までお知らせください。

寺院事務所からzoom link を送らせていただきます。

故人が祥月でない方もご遠慮なくご参拝下さい。

永代経法要 (11月)

浄土真宗では、永代供養とはいわず、永代読経＝永代経といいます。亡き人のために永代経懇志を上げていただくことで、将来にわたって（永代に）念仏のみ教えを受け継がれていきます。永代経法要では、読経を通して今まで寺院を支えて下さった往生された方にも感謝を申し上げ、お勤めをさせていただきます。

日時：11月19日(日曜日) 英語午前11時から

場所：トロント仏教会 / Zoom

お勤めの後に永代経にちなんだ法話がございます。

どうぞご家族ご友人を誘ってご参拝下さい。



じょうどうえ

成道会 (12月)

成道とは、お釈迦さまがさとりを開かれたことをいいます。お釈迦さまは、29歳で出家され、それから6年間、苦行をされ、瞑想に入り、49日目の早朝、さとりを開かれました。それが12月8日に当たります。お釈迦さまは、人は、なぜ死んでいくのか、死んでいくのになぜ生まれてくるのか、この人生にどんな意義があるのか、という人生の苦悩の解決を求めて出家されました。私たちは、そのことを一生涯知らずにむなしく終わっていくかもしれません。そういった姿を悲しまれ、生死問題を既に解決して下さい、南無阿弥陀仏と喚んでくださる仏さまがおられると教えて下さったのが、お釈迦さまでした。お釈迦さまが成道されたおかげで、今私たちは、生死問題の答えであるお念仏に出遇えたのです。

日時：12月17日(日曜日) 午前11時から(英語)

場所：トロント仏教会、Zoom

どうぞご家族ご友人を誘ってご参拝ください。





本願力にあひぬれば

むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて

煩惱の濁水へだてなし

『註釈版聖典』五八〇頁

本願寺より参りました西冲元徳と申します。私は日本で僧侶や住職、そして開教使になられる方々に浄土真宗のお勤めやお作法をお伝えすることを専門としており、この度はその研修会の講師としてカナダへ赴きました。

本日（10月15日）は、初めてこのトロント仏教会にお参りさせていただきまして、このご縁を機にお取り次ぎをさせていただきたいと思えます。

私事ではありますが、本日は私にとって特別な日です。それは私の祖父の亡くなった日であるからです。往生してちょうど今日で丸10年となります。

私が幼少の頃、よく祖父は私をお墓参りに連れて行ってくれました。私の大好きなドーナツをお墓にお供えしてお参りし、そしてお家に帰って食べるのがとても楽しみだった思い出です。

お墓参りは決まって毎月15日でした。ある日私は祖父に「なんで毎月15日にお参りするの？」と尋ねました。すると祖父は「おじいちゃんのお母さんが15日に亡くなったからだよ」と答えました。

私は「じゃあ15日って嫌な日だね、不吉な日ってことだ」と聞きます。すると祖父は微笑みながら「いや。嫌な日でも不吉な日でもないよ。悲しい日ではあったけど、悲しい虚しいままで終わらせないと仏様は教えてくれているんだよ。そしておじいちゃんにとってすごく大切な日なんだよ」と答えました。

日本では亡くなった日のことを「いのちの日」と書いて命日といいます。ただ命を終えた日ということではありません。この世の縁が尽き、そして仏とうまれて往く、それが

が命日ということですよ。

命日というのは仏となった誕生日でもあります。それは我がいのちを問い、いのちを尊むことでもあるのです。

私にとって祖父同様に15日は大切な日となりました。本日10月15日、日本から遠く離れたこのトロントの地で亡き祖父を偲びつつ、同じ南無阿弥陀仏の如来様に手を合わせ念仏申しながら「そのいのち悲しいままで虚しいままで終わらせない。

仏となる尊いいのち。必ず仏とならしめよう。そのまま救う我にまかせよ」とはたらき続けて下さっている阿弥陀様の本願に出遇わせていただきました。

お念仏申す中に今もこれからも仏となった亡き祖父に導かれていく私でありました。

浄土真宗本願寺派 布教使

西冲元徳

ません。好きな物もいつかは壊れ、手放さなくてはならなくなる。はたまた、私のころそのものが不定であるため、好きだった物が壊れなくとも、手放してしまうこともありま

す。
それは物だけでなく、いのちも例外ではありません。親や子ども恋人など、好意を寄せる人がいても、その人も、そしてこの私自身もいつかは死に往く不定の存在です。

私たちは、このような喪失感や嫌悪感から少しでも目を背けたくなります。しかし、避けていくだけでは愛別離苦の苦悩を解決したことはありません。

それは今も昔も同じことです。お釈迦様がまだご存命だったとき、ある女性がいのちを落とした小さな赤子を胸に抱きながら相談に来ました。

その相談とは、亡くなったわが子をお釈迦様の力で生き返らせて欲しいというものでした。するとお釈迦様は一言「分かった。」と言いま

した。その女性は大喜びです。しかし、お釈迦様はある条件を一つだけ彼女に突きつけました。

その条件とは、「まだ死人の出ていない家から芥子の実をひとついただいなさい。」とおっしゃったのです。彼女は急いで村に戻り、多くの家々を訪ねました。

しかし、どの家もいままでに大切な人を亡くしている経験をもつ家族ばかりで、彼女は条件の揃った芥子の実を手に入れることができませんでした。

日が暮れる頃、彼女がお釈迦様のもとへ戻って来ました。お釈迦様は「まだ大切な人を誰一人として亡くしていない家から芥子の実をもらうことはできましたか？」と尋ねました。すると彼女は、「わが子を生き返らせなくて大丈夫です」と答えました。

婦人は村の家々をまわっていく中で、誰もが愛しき大切な人を亡くしていることに気づかされたそうです。わが子を生き返らせるといふ執着から離れ、苦悩から目を背けるのではなく、苦悩を苦悩として、そのままを受け入れ、のちに仏弟子になったというお話です。

お釈迦さまの「芥子の実をもつてきなさい」という一言は、方便です。方便とは本来、人を真の教えに導くための手立てという意味です。お釈迦さまは、彼女が自ずと真理へと導かれる縁起を与えていたと言ってもいいかもしれません。

私たちはよく「縁起が良い」や「縁起が悪い」という言葉を使います。しかし、本来「縁」に良いも悪いもないのです。

いまある縁をどのように受け止めるかは私たち次第であり、その縁の縁として、そのままの尊さを教えてくれるのが仏さまの教え（仏教）であると言えます。

トロント仏教会

駐在開教使 大内祐真

佛心

二〇二三年十一月号

浄土真宗 本願寺派

トロント仏教会



芥子の実

人が仏様に合掌する姿には、さまざまな背景や理由があると思います。

なかには願ひ事を念じるために、その手を合わせる人もいるかもしれませんが、もしくは、感謝のこころを表すときに、その手を合わせる人もいます。

僧侶という立場柄、私は葬儀や祥月法要を通して、人が合掌する姿をよく目にします。法事の際は、亡き人をご縁として、その方の遺徳を偲ぶと同時に仏様のおはたらきに合掌させていただきます。

いまこの法話を読まれている方の中には、大切な人を亡くし、それをこ

縁として合掌する人生を歩まれている人もいるのではないのでしょうか。そういったご縁を私たちは「仏縁」と呼びます。

お釈迦様はその「縁」ないしは「仏縁」を大変重要な教えとして説かれました。なぜなら、縁を明らかにすることなくして、事象の原因と結果は見えてこないからです。

例えば、花が咲くという結果（生起）があります。なぜ花が咲いたのか？それは花を咲かす種（因）があったからです。ただ、種だけでは花は咲きません。

そこに栄養となる土や水、太陽からの光という（縁）があつて、その種は青々とした芽を生やし、つぼみをつけ、花を咲かすことができるのです。

単純明快は例えを書きましたが、このように植物ひとつとっても、すべてのものには、必ずそれを生んだ因（直接的原因）と縁（間接的原因）とがあり、それを因縁生起＝縁起とあらわします。

『阿含経』に「これある故にこれあり、これ起こる故にこれ起こる、これ無き故にこれ無く、これ滅する故にこれ滅す」とあります。現実には、因と縁と果とが複雑に関係しあい影響しあつて、互いにもちつめたれつ状態をつくつています。

お釈迦様は、私たち衆生の抱く苦悩にも、この「因縁生起」が深く関わっていると説かれました。私たちは、なぜ悩み苦しみの苦悩を抱くのか。その原因はさまざまですが、その中でも代表的なのが執着をするこ

とです。例えば、人は好きな物が目の前にあると、その好きな物を我がものにしたと考へます。そして我がものになると私たちはそれを永遠のモノにしたがる。しかし、この移り変わる不定の世に、永遠というものはあり